

尼死人を食す」も見える大飢饉となる。翌二年四月三日更に文應と改元。しかし五月一六日よりの降雨に六月五日止雨行法、その間に人屋流失、山崩れ、死者等が見える。この連続の災害を聖人は後に『安国論御勘由來』に示される(定四二二)、またこの災害を為政者の謗法と『立正安国論』を七月一六日献呈、諫言されるが、八月二七日松葉谷法難、弘長元年伊豆配流に続く。以上青景の中、聖人は当時人信の直檀からの粟、焼米、干飯、海草等の当座の救荒食の支援のもと、寝食を忘れての正法弘通期と考えるが関係御書はない。

第三期は文永五年(一二五八)から文永八年(一二七二)九月一二日佐渡配流決定までの足掛四年であり、この期にのみ食供養の四書を拝す。即ち文永七年二月二日「白米一斗一略一鎌倉は世間渴して候」(定四五九)。

同年「白米一ほかひ本斗六升一略」(定四六一)。翌八年五月「殊にお祝として餅、酒一略」(定四八六)。同七月一二日「雪のごとく白く候白米一斗一略」(定四九二)。の如く佐渡配流前、時に白米も食された聖人の以上困乱の鎌倉期であったが、自由な御身、配流期の如き、ご入山直後の御書「けち申ばかりなし。米

一合もうらず、がししぬべし一略」(定八〇九)に続く身延期ほどの逼迫した食生活ではなかったと考察できるのである。

## 円光日陣に於ける本迹論の一考察

——『開目抄』『本因本果の法門』の

解釈を巡って——

光 林 義 高

室町時代に活躍した勝劣派の学匠・円光坊日陣は、その著作(門弟筆記の講義録を含む)中『開目抄』『本因本果の法門』を凡そ八十回に亘って引用し、自己の所謂約教本迹実相勝劣論の証左として最重要視した。

日陣に依れば、そこでの聖意は、迹門実相体を破斥して本門十妙就中本因本果二妙を以て本門実相体を詮顯・擁立する処に主眼があり、「本因本果」の具体的概念を無始九界Ⅱ本因と無始仏界Ⅱ本果とが互具相即する「本門十界の因果」の意味とし、これが本門一念三千成立の根本義として論じられると力説した。殊に、日陣は、そ

の場合、九界はそこに具備する仏界が本仏世界「体内実」と絶対肯定される処に「本因」と定義される所以があり、又、真実の仏界たる本仏世界は所具の九界（九界の性をも含む）を「体内権」と取り込み容認する処に「本果」の真髓が存する、と説明し、かかる法界觀を、本果開顯を絶対的機軸に成立した本仏果上の事理不二の世界と規定し、加之、文中に「ときあらわす」とあることから、この理を本門の教相の重で受容しようとした。

即ち、日陣は、『開目抄』「本因本果の法門」から、九界と仏界とが二者対峙的でありながら矛盾の同一の連関に於て止揚され相即するという円教の教理的特徴の眞骨頂を本門の発迹顯本の教説上に見、此処に天台教学から蟬脱した宗祖教学の独自性が存すると把握していたと言える。惟うに、天台教学に於ては、本仏の本時に於ける過去因位修行（本因）とかかる円因を究竟することに因って円満に成就された妙果（本果）、及び本果を獲得した本仏がこの現実世界で実践する無始本来の無限の菩薩行（本因）という「師仏実因実果」、並びに『法華文句』卷第一の四節三益中の、前二節の種熟脱三益の展開に象徴される「弟子（本眷屬衆生）実因実果」とが「本因本果」の意味する処であつたと思料できることから、

日陣の主張通り、『開目抄』「本因本果の法門」は宗祖独自の法門と見るのが至当であらう。

又、日陣は、その場合の九界を、本仏果上に在って、それと俱時相即し、常住壽命を具有する本仏の無限不尽の因位（本因）に配釈していたことが確認されるのであり、この辺に、日陣が对本国寺日伝との本迹論争（陣伝論争）で強調した本門宗体相即一如の教義的基盤の一面を見出せることに気付く。

ところで、日陣と本迹論争を展開した日伝は、『五十箇条難勢』（大智院日聡執筆）でこれを『法華玄義』卷第九下明宗章の「師弟本因本果」、乃至「宗家体」と規定し、体（非久非近非本非迹の実相理）から遊離した宗の範疇に位置付けた。それ故に、実相の致劣を争点とする本格的な本迹論争の嚆矢に位置する陣伝論争に於て、既に、今日の教学でも宗祖の本門法華の意味を明瞭に説明した象徴的説示とされる「本因本果の法門」を巡って全く異質な解釈が施されていたことを指摘できる。又、この点は、現在の我々が、宗祖教学のアイデンティティを奈辺に見出していくかという面に直結した重要な教理的研究課題であるように思われてならない。